

仕事を辞めたらアイドルに迫られた

早見 彼方

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アイドルのプロデューサーを辞めた男に迫る、アイドルの話。

# 目次

楓イベント1	1
楓イベント2	10
凜イベント1	20
凜イベント2	29
未央イベント1	38



# 楓イベント1

社会に出て七年が経った。俺は今、アイドルのプロデューサー兼マネージャーをしている。仕事内容は多岐に渡っていて、アイドルの仕事を取ってきたりアイドルのスケジュール管理をしたり、作詞作曲もたまに行ってアイドルに提供したりしている。

本当はプロデューサーとマネージャーの仕事は別々の人間がそれぞれ担当すべきなのだろうけど、俺が勤める346プロダクションでは両方担当するのが普通だ。芸能界で最大手の企業なのだからプロデューサーとマネージャーを別々で雇えばいいのに、あえて両方の仕事を一人に任せている。若い頃はいろいろな仕事を行って経験を積みませたいという腹積もりらしい。上の立場の人間になれば希望の仕事に専念できるとのことだ。

俺はまだ上の立場の人間ではないため、毎日が大忙しだ。アイドルが仕事に向かう際には車で送り、仕事場で相手先の人と挨拶を交わし、仕事に臨むアイドルを見守る。その時にはしっかりと仕事の出来を確認し、今後の成長に活かせるように後で助言をする。

「ありがとうございます！  
島村卯月しまむらうづき、プロデューサーさんのために頑張ります！」

「キョートで頑張り屋なアイドル。ハーファップにしたお嬢様風の長い髪と笑顔が似合う女子高生、島村卯月に笑顔で言われると、俺ももつと頑張ろうと思えてくる。前から笑顔が素敵だと思っていてその笑顔をもつと（ファンに）見せて欲しいと伝えると、何故か卯月の顔が真っ赤になった。

仕事が終われば車で再びアイドルを別の現場へ。その日に他の仕事がなければ会社へ真っ直ぐ戻る。

「プロデューサー。良かったら、私の家に来ない？ 親が一度会ってみたいって」

別の日。助手席に座る、実家が花屋のクールなアイドル。長い黒髪の涼しげな顔の女子高生である渋谷凜しぶやりんはそう言って、俺の体に触れてくる。最近妙にスキンシップが多い気がする。この前水着での撮影仕事で、よく似合っていて（ファンが）惚れ惚れすると褒めちぎった頃からだ。とりあえず、運転中は危ないからやめてほしい。

社内にいる時はアイドルの次の仕事を獲得、もしくは自分で企画などを行っている。上司や上の役職の人達に承認を得て企画が通ると、その企画を実現させるための会場の確保などの調整に取り掛かる。そういった仕事だけに注力できれば比較的楽なのだけど、そうは言っていないのが現実。アイドルが仕事に向かう度に、近場でなければ必ず車を出すようにしている。アイドルの護衛も俺の仕事だ。外を出歩いている時にファンに気づかれて、騒ぎになったら大変だ。最近は何物騒だからな。

「プロデューサーって過保護だよ。そんなに未央ちゃんみのことが心配なのかな？」

またまた別の日。現場への行き方をカーナビで検索していると、後部座席に座る少女に首へ抱き着かれた。毛先が外へ軽く跳ねた茶髪ショートヘア。明るく元気なパッション系アイドル、本田未央ほんだ みおだ。以前、(ファンは)胸が好きだからもつとその大きな胸でアピールしてほしいと助言をしてから大胆になった。何故俺に胸を押し当てるのだろうか。ファンに抱き着こうとしたら止めようと思った。あと、そろそろ出発するからシートベルト締めて。

仕事が終わるのはいつも夜遅く。未成年のアイドル達はもうとつくに帰宅していて、ここから一人で落ち着いて仕事ができる。最近残業に対して世間は厳しくなっているが、やはり芸能界などで働いている以上は仕方がない部分もある。

俺だつて早く帰りたいと思つている。入社してから最近になってだが、働きすぎなのではないかと思うようになった。今までは、仕事とはそういうものだろうと思つて頑張つてきた。

しかし、歳を重ねるごとに別の思いが浮上した。

このままでいいのだろうか。まだギリギリ二十代だが、これから先もこうして生きていくのかと。結婚など、したいこともある。でも、出会いもなく恋愛すらままならない現状ではそれも望めないだろう。

俺は転職を決めていた。昔からの友人に仕事を紹介されている。給料は今ほどではないが、人間関係もよくてワークライフバランスの良い会社だとのことだ。世間では当たり前のことなのだろうが、私生活に時間を割けるのは非常に有難い。

「プロデューサーさん。今から飲みに行きませんか？」

まだプロダクション内に残っていたクールで神秘的なアイドル。ふんわりとしたショートボブヘアでオッドアイが目立つ綺麗な高垣楓たががきかほさんに誘われ、俺は領いた。仕事は残っているが、明日以降に回そう。パソコンを閉じて準備をし、部屋を出た。その際に、「えいっ」と楓さんに腕に抱き着かれる。お酒とダジャレを好むこの元担当アイドルはどうやらもう酔っているらしい。もしかして、お店を梯子するつもりなのか？

連れていかれた先は、お洒落なバーだった。知る人ぞ知る名店なのか、お客の数は少ない。いつもの、他の大人アイドル達が出没する居酒屋に行くのかと思っていただけに少し意外だった。あの店の、俺達がいとも使用している一画は魔界だ。店主の厚意で店の奥を使われてもらっているが、他の客もいるのだから少し慎ましくしてほしいと思う。

「乾杯」

カクテルの入ったグラスを軽く触れ合わせ、落ち着いた音楽の流れる少し薄暗い空間でお酒を静かに楽しむ。普段とは違う空気感にどぎまぎしつつも、お酒を口に運ぶうち

に体が温まってきた。

「……プロデューサーさんって、好きな人はいるんですか？」

軽く細められた眼差しで見つめられる。やっぱり酔っているようだ。

それにしても、好きな人か。言われてみれば、誰かを好きになったことはなかったな。「いませんよ。仕事ばかりだったので」

学生時代は男子校で、部活動は陸上部をやっていた。毎日二十キロ近く走っていた頃が懐かしい。今はあのときほど体力はない。移動もエレベーターや車ばかりだし。少し、歩かないと駄目だな。

「……いないんですね。良かった」

ほっと息をつく楓さん。俺に先を越されていないかと心配だったのだろう。

「楓さんはいるんですか？」

「いません」

少し食い気味に言われた。あと、どうしてかワクワクとした様子で見つめられた。どうしたのかと首を傾げていると、「鈍感……」という小さな呟きとともにため息を吐かれた。え、俺のせい？

その後も、日常的な会話に花を咲かせる。特に、恋愛や結婚といった話が多かった。楓さんは自分の将来に危機感を抱いているのだろうか。確かに、アイドルだから恋愛す

るのもひと苦勞だ。ちなみに、アイドル達に恋愛をしてはいけないという会社からのお達しはない。わざわざ言うまでもなく、暗黙のルールとなっているのだろう。

二人でバーを出て、夜道を歩く。途中で楓さんが「休憩、しましょう」と言ってきたから無理矢理牽引した。両足で地面を踏み締め、その場から動きたがらない子供を引つ張るような親のような形となった。

楓さんを家まで送り届け、家に連れ込もうとする楓さんを引き剥がして一人帰宅の途に着く。楓さんに限らず、俺の担当アイドル達は俺を家に入れようとしてくる。恋人でもない男に家へ上がってほしくないと思うのが普通だと思っていたけど、そうではないらしい。

ともあれ、これが俺の日常。この日は飲みに行ったから帰りは更に遅くなったけど、普通に帰っても遅い時間帯だ。趣味もないため、帰って食事をしてお風呂に入って歯を磨いて眠る。温かい布団が俺の癒し。

そう思っていたプロデューサー時代は、もはや過去の出来事だ。やっぱり拘束時間が厳しいため、俺は別の仕事へと転職することにした。

俺は、346プロダクションを辞めた。しっかりと上司や部下に引継ぎを済ませ、円満退社。いつも厳しかった人が送迎会で優しくしてくれて、少し嬉しくもあり、悲しくもあった。業界が全体的にブラックなだけで、人間関係はそれなりにホワイトな会社

だった。

アイドル達とも別れを告げ、新しいプロデューサーの下で頑張ってもらおうよう伝えた。陰ながら応援している、と。どうして辞めるんですか、と聞かれたが、事情を説明すると納得してくれた。

もつと食い下がってくるものかと思っただけど、素直で安心した。

「プロデューサーさんが、プロデューサーさんでなくなるんですよね」

「それって、私達にとつて都合がよくない？」

「うんうん。やっぱり、アイドルとプロデューサーの関係じゃいろいろと厳しいからね」  
「……………どういうこと？」

卯月、凜、未央。担当アイドル三人娘の言っている意味はわからなかったけど、納得してくれたようで助かった。もしも強く引き留められていたらと思うと、辞める決心は多少鈍っていたかもしれない。

誰からも祝福されて、俺は346プロダクションを去った。

これからアイドル達との接点はなくなるけど、それなりに楽しい日々が送れるだろう。趣味を見つけたらお嫁さん探しをしたりするのもいいかもしれない。今までできなかったことができることに、俺は期待を抱いた。いろいろと想像が膨らんだ。

「プロデューサーさん。おはようございます」

でも、こういった出来事は想像していなかった。

ある日、マンションの高層階にある自宅のベッドで目を覚ました俺を起こしたのは、元担当アイドルの楓さんだった。

格好は、裸エプロン。胸の谷間やら白い太股やら肩やらが露出していて、非常に目に毒だった。慌てて上体を起こした俺に向かってそんな恰好で迫ってくるものだから、俺は後ずさりしてベッドの隅の壁に追いやられた。

そうして顔の横の壁を楓さんの両手で塞がれ、につこりと微笑みかけられる。綺麗なアイドルに裸エプロンで壁ドンをされて迫られる。この状況は男にとっては嬉しいことなのだろうが、素直に喜べない自分がいた。

額に冷や汗が滲み出る。何だか、肉食動物に捕食される前の草食動物の気分だった。「私と、結婚を前提にお付き合いしませんか?」

片手を壁に突いたまま、楓さんはもう片方の手を俺の顎に移す。そのままクイツと顎を上を持ち上げられ、視線が上がる。楓さんの青と緑のオツドアイが動揺する俺の姿を映していた。

これって、男と女の立場が逆ではなからうか。

あまりの異常な出来事に俺は場違いな考えを浮かべた。

この日から、プロデューサー時代とは違う刺激的な日々が幕を開けた。

「私があなたを幸せにしてみせます。あなたの人生を、私にください」  
やっぱり、男としての立場がなかった。

## 楓イベント2

朝から裸エプロンの楓さんに迫られ、告白されるといふ刺激的な体験をした俺。心臓が未だかつてないほどに大きく鼓動し、頭の中は真っ白になっていた。しかし、告白に對して「はい」と答えそうになった自分の口をどうにか噤むことに成功した。

「か、楓さん……」

「はい、ともひろ智弘さん」

名前で呼ばれた。しかも、顔を近づけられている。近い、本当に近い。楓さんの吐息やら、体から漂う甘い匂いやらのおかげで邪な感情を抱いてしまう。今、俺の頭の中では天使と悪魔が戦っている。

『あの、楓さんはプロデューサーさんにとつての四つ葉のクローバーだと思います……』  
『告白を受けたほうがいいと思いますよ。カワイイボクが言うんだから間違いはありません!』

あれ、戦えていない? むしろ、楓さんをお勧めされた。と言うか、どうして天使と悪魔がアイドルなんだ。後者は悪魔というより、自称小悪魔だし。

「どうしました?」

「え、あ、いや……」

俺に向かつて、楓さんはさらに身を寄せてくる。このままだと、本当にまずい。

俺は楓さんの体からすり抜け、ベッドから転がるように降りる。そして、慌てて立ち上がって楓さんに向かつて声を掛ける。

「楓さん、酔ってますよね？」

「いいえ。酔っていません」

俺がいなくなったベッドに座って、楓さんは真剣な眼差しを向けてくる。

「私はあなたのことが本当に好きです。ですから告白しました」

ゆつくりと言葉を紡ぐ楓さん。その言葉を聞いて、本当に冗談ではないのだと悟ってしまった。元担当アイドルだった楓さんは、プロデューサーだった俺に好意を寄せている。今まで気がつかなかっただけに、衝撃的だった。

正直なところ、凄く嬉しかった。楓さんと一緒にいると楽しいし、こんな人と結婚できる人は幸せなんだろうなと思っていたからだ。でも、まさかその結婚相手に俺が選ばれるとは思わなかった。

はつきりと告白されてしまった以上は、こちらもはつきりと答えなくてはいけない。

でも、今の俺に難しそうだった。

俺は、楓さんのことをどう思っているのか、自分の中でも曖昧だったからだ。好きだ

けど、それは人としてなのか。それとも、異性として意識しているのか。今まで恋愛事など無縁の生活を送っていたツケが回ってきた。

「……楓さん」

「はっ」

「告白はすごく嬉しいです。ありがとうございます」

「それでは……」

「でも、すぐにお返事をすることはできません。俺に、時間を頂けませんか？」

俺が言うと、楓さんは小さく微笑んだ。

「ええ、勿論。いつまでも待ちます。ですから、いつかお返事を聞かせてくださいね？」

楓さんはベッドから降りて、俺の前に立つ。また迫られるのかと身構えてしまう俺を他所に、楓さんは寝室の扉を出て行く。その後ろ姿を見ようとして、俺は視線を横に逸らした。

裸エプロンだから、丸見えだった。

俺は俯き、鼻を手で抑える。そんな俺に向かって、楓さんの声が届けられた。

「朝ごはんにしましょう。智弘さん」

「……ええ？」

扉の方に顔を向けた俺は、扉から顔を覗かせてにこやかに笑う楓さんを目にした。

仕事を辞めて一日目の朝。食卓に座り、のんびりと朝食を食べる。こんなにゆっくりとしたのはいつ以来だろうか。プロデューサー時代は何もなくてもせかせかと動き回っていたように感じる。

本当なら、この朝食は忙しさから解放された俺にとって安らげる時間だったはずだ。でも、今日は安らぎとは無縁の朝食となりそうだった。

「はい、あーん」

俺の隣の席に座った楓さんが、卵焼きを掴まんだ箸を俺の口元に向けてくる。

さつきからずつとこんな感じだ。事あるごとに、俺へと朝食を食べさせようとしてくる。これで裸エプロンなら陥落しそうだったが、今はなんとか無理言って私服に着替えてもらっている。

一応、俺の理性は保たれていた。

「楓さん、俺達は恋人の関係ではないので……」

「え、駄目ですか？ それじゃあ」

楓さんは箸の代わりに顔を近づけた。

「口移し？」

「もつと駄目ですよね?!」

恋人ではないのに、口移しが許される関係とは何だろうか。

「自分で食べられますから」

俺は箸を動かし、朝食を進める。

今日の朝食は、楓さんが用意してくれた和食だ。柔らかそうな白米とふんわりとした卵焼き。香ばしい匂いを漂わせる焼き魚と、温かなみそ汁。あとは、楓さんの実家がある和歌山県の紀州梅。

どれも美味しかった。楓さんが料理している姿をあまり見たことはなかったけど、ここまで料理が上手だとは思わなかった。民宿の朝食で出されていても、遜色がない見た目に驚いたほどだ。

ちなみに、俺が見た楓さんの料理シーンは、五十嵐響子さんいがらしきょうこという高校生アイドルが担当する料理番組だ。何故か楓さんが持参してきた焼酎がキッチンの端に置かれていたのが印象的で、あまり内容を覚えていない。

『しよっちゅう飲むんですよ。焼酎』しよっちゅう

ダジャレの直後に、五十嵐さんの料理の手とお茶の間が凍ったのは覚えている。

でも、そうか。楓さんは料理ができるのか。

『お帰りなさい。夕食の準備はできていますよ?』

仕事から帰ってきた俺を出迎え、手料理を振る舞ってくれる楓さんの姿を幻視する。

何てことだ。さっきの印象が強すぎて楓さんはまたしても裸エプロン姿だった。今

も脳内にしつかりと刻み込まれてしまったその姿は、いつか夜のお供にしてしまいで怖かった。恋愛経験はないけど、俺も男の子なんだ。仕方ないだろ！

「えいつ」

俺が箸を止めて内心で悶え苦しんでいると、楓さんの指先が俺の頬を突いた。

「朝食を食べてくれないと、超ショック」

「あ、はい……」

何だか、凄く冷静になれた。凄いよね、楓さんの駄洒落。五十嵐さんの料理番組へ出演した二十代アイドルの川島瑞樹かわしまみずきさんによる、キャピキャピした女子高生の物真似ほどではないけど。楓さんに続いて二週連続でお茶の間が凍った瞬間だった。

どうでもいいけど、キャピキャピって死語だよな。十代アイドルに言っても伝わらなかったことがある。いやでも、通じる人もいたな。JKアイドルの安部菜々あべななさんとか。それなら、死語ではないのか？

俺は食事を進めながらくだらないことを考える。

何故って？

「あ、智弘さんって意外と体がしつかりしているんですね？」

楓さんが俺の体を弄り回しているからだ。くだらないことを考えていないと、理性が危うい。腕に抱き着いて胸を押しつけてきたり、肩を抱き寄せて「私の男になっちゃい

「ましよう」とか耳元で囁いてくる。最近、月曜日9時からのドラマで男装の麗人を演じたせいとか、一々台詞がイケメンだった。壁ドンとか顎クイも全部そのドラマ『幸子ちゃん』がカワイイのが悪い』の影響だろう。そのドラマの主演は興水幸子さんこしみずさちこという中学生アイドルで、いろいろな男装女子プラス男の娘から積極的に迫られる総受け主人公を演じていた。さすがは新進気鋭のお笑い芸人の数倍のリアクションを誇るとされる興水さんだけあって、リアクションが面白い作品だった。Twitterでお笑い芸人から賞賛されていた。

話は脱線したが、何とか食事を終えた俺。残念なことに、緊張で途中から味がしなかった。どうして楓さんの所業を止めなかったのかというと、嬉しかったから。美女に体を触られて喜ばない男子がいるだろうか。いや、いない。

食後は、楓さんとキッチンに並んで洗い物をする。

「二人の共同作業ですね。これが終わったら、今日どうしますか?」

楓さんの駄洒落を軽くスルーする俺。まずい、感染した。

洗い物をしながら、俺はふと疑問に思ったことがある。というか、朝起きてからずっと思っていたけど、衝撃の展開が続いたせいで一時的に吹き飛んでしまっていたのだ。

「あの、楓さん」

「なんですか?」

「俺の家にどうやって入ったんですか？」

俺は昨日、しっかりと家の鍵を閉めたはずだ。マンションだから、窓から侵入ということもできない。それならば、いったいどこから侵入してきたと言うのだろうか。

「合鍵です」

「没収します」

楓さんが見せつけた鍵を取ろうと手を伸ばしたが、華麗に躲かれた。

「いったいどうやって手に入れたんですか！」

「名前は言えませんが、某アイドルの方から頂きました」

「誰?!」

346プロダクションには大勢のアイドルが所属している。俺の家の合鍵をこっそりと作れそうな人材。うん、複数人いる。これだけの情報では、犯人を割り出すことは難しいだろう。どうなってるんだ、346プロ!

何度か鍵を取ろうと試みるも、楓さんはアイドルとしてステージに立つて踊るかのようには綺麗に俺の手を避ける。現役アイドルで体力のある楓さんと、最近運動らしい運動をしていない俺とでは勝敗の行方は明白だった。筋トレは定期的に行っているが、やはり普通の筋トレでは体力までは補えない。

「くっ……」

俺は膝を屈した。こんなに早く呼吸が乱れるだなんて、これが衰えか。

「う、ふ、ふ……」

指先に摘まんだ鍵を弄び、楽しそうに俺を見下ろしてくる楓さん。

「勝手に合鍵を作ってしまったってごめんなさい。これは私にとって必要なんです」

「な、何故……？」

「これがないと、あなたへ積極的にアプローチできませんから」

そう言つて笑う楓さん。その表情が美しく、俺は茫然と楓さんを見つめた。

この心臓の高鳴りは、果たして恋なのだろうか。それとも、綺麗な楓さんを見て緊張感を覚えただけなのだろうか。今の俺にはわからない。でも、いつかは必ず自分の気持ちを抱握しなくてはいけない。

そして、その時には楓さんに自分の正しい想いを伝える。

だから、それまで俺と楓さんはただの仕事仲間だ。

「次は本気でいきます」

「負けませんよ？」

俺は楓さんに再度勝負を挑む。何か言いくるめられそうになつたけど、やっぱり恋人でもない人が合鍵を持っているのはおかしい！ その一心で、俺は楓さんに向かって飛びかかった。

結局、合鍵を奪うことはできなかった。

「これはもう、責任を取ってもらおうしか……」

代わりに、誤って胸に触ってしまった。柔らかかったです。ごめんなさい。不慮の事故です！

## 凜イベント1

『ふふーん。朝からボクの顔を見られるだなんて、皆さんはとても幸せですねえ!』

楓さんにつってもらった朝食を食べ、洗い物を済ませてから小一時間。楓さんから我が家の合い鍵を奪うことは叶わなかった。もう合い鍵は諦めてソファアーに座り、一緒にテレビを見ていたところ、楓さんがおもむろに腰を上げて口を開いた。

「すみません。そろそろ失礼させていただきますね」

「あ、仕事ですか?」

「はい。午後からですけど、準備もしないといけないので」

「そうですか。頑張ってくださいね。応援してます」

「はい。高垣楓、頑張ります。なんて、卯月ちゃんに怒られちゃいますね?」

「あはは」

冗談を言う楓さんを見送ろうと俺もソファアーから立ち上がる。楓さんと一緒に玄関へと向かい、靴を履く楓さんの後姿を観察する。何とというか不思議な気分だ。俺の家から出立する楓さんの姿を見ることになるとは思わなかった。

「今日は楽しかったです。本当はもう少し一緒にいたかったですけど」

鞆を体の前で両手で持ち、俺の方へと向き直った楓さん。微笑んでいるけど、少し残念そうな感情がこめられているように感じた。本当に俺と一緒にいたかったのだという想いが伝わってきて、男として嬉しい限りだ。

「良ければ、また来てください」

裸エプロンには驚いたけど、久しぶりに一緒に居られて楽しかった。楓さんと落ち着いて話した記憶は意外に少なく、貴重な体験だった。居酒屋などで他の大人アイドルに絡まれるような状況が大半だったからだな。そう言えば、あの飲み会にもこれからは参加できなくなるんだよな。そう考えると、かなり寂しくなった。

「はい。そうさせていただきます」

俺の言葉に、屈託のない笑みで返す楓さん。それを見て、たった今感じた孤独感はなくなった。また会える。別に今生の別れをしたわけではない。会おうと思えば会える距離にいる。仲の良い知り合いの大半はアイドルで、完全に一般人となった今、自発的に会うのは少しだけ躊躇われてしまうけど。アイドル達は多分、気にしないのだろうな。

「それでは、智弘さん。お邪魔しました」

「はい。いつてらっしゃい、楓さん」

お仕事に行く妻を見送るのって、どんな気分なんだろう。そう思っていたせいで、少

し妙な言い方になってしまった。これでは本当に恋人の関係になってしまったようだ。玄関の扉を開こうとした楓さんも途中で動きを止めて、少し驚いた様子で俺を見ていゝる。まずい、やっぱり失言だった。

「すみません。変なことを言つて」

「いえ。……いつてきます。いつか、本当の意味でここに帰つて来られる人になつてみせますから。それまで、私の我が儘に付き合つてくださいいね？」

楓さんはそれだけ言うと、俺の家から出て行つた。最後に見た楓さんの顔からは、強く何かを決心する想いが感じ取れた。

居間に戻つて来た俺は、ソファアに座り直す。

「……急に静かになつたな」

ずっと一人暮らしてこの静けさには当然慣れていたはずなのに、今は違ふ。先ほどまで楓さんといった記憶が今も鮮烈に蘇つてくる。今の状況が物足りないと思つてしまふ強烈さだ。朝のひと時を一緒に過ごしただけでこれならば、毎日顔を合わせるようになつたらどうなるのだろうか。もう二度と、離れたくないと思つてしまふのではないか。

わからないな。元担当アイドルだというのに、未だに楓さんが何を考へているのかもわからない。恋人になれば少しは違つてくるのだろうか。まだまだ俺の知らない楓さ

んの一面を目の当たりにできるかもしれない。

裸エプロンとか。

「くっ……」

いけない。また思い出しそうになった。頭を左右に振って邪な感情を捨てる。せめて、そう言う妄想は夜にしよう。朝からエッチなことはいけないと思う。

テレビでも観て気分でも紛らわすでしょう。俺はリモコンを手にし、やっていたニュース番組から何気なくチャンネルを切り替えた。

『この子達、カワイイですね。まあ勿論、ボクほどではありませんが』

いろいろな小動物と戯れる輿水さんがテレビに映っていた。髪の一部が外ハネになったショートヘアと愛らしいドヤ顔が特徴的な彼女。目線は動物に対して向けられておらず、カメラを向いていた。動物の紹介を目的とした番組なのだろうが、そこでも自分の可愛さを主張するのが輿水さんらしかった。

「この子、よく働くなあ」

先輩プロデューサーの担当アイドルである輿水さんは、よくテレビに出ている。その先輩とは仲が良かったから、輿水さんとも結構話したことがある。テレビで見てもわかる通り、リアクションが面白い子。収録された映像だから過去のものだけど、きつと今も元気なのだろう。

知り合いのアイドルが働く姿を見て和む俺。テレビで知り合いを見る機会は多く、楽しみながら緩やかに流れる朝の時間を満喫していた。

「あれ？」

テレビを見ていると、インターフォンが鳴った。こんな朝早い時間に誰だろうか。新聞の勧誘、ではないよな。楓さんが忘れ物でも取りに来たとか？

「はいはい。今行きますよ」

玄関へと向かい、扉をゆつくりと開け放つ。そこには人が立っていて、外の青空よりもその人物の姿が目に入るのは当然だ。だけど、予想だにしない人物が俺の視界に入ったことで、俺は扉を内側から開いた体勢のまま体の動きを停止させた。

「……凜？」

「おはよう、プロデューサー。じゃなかった、元プロデューサーだったね」

つい最近まで担当アイドルだった渋谷凜が、俺の家の前にいた。ズボンタイプの落ち着いた服を着て、いつも通りの冷静な態度で佇んでいる。人によつては愛想がないと思われるだろうクールな印象だけど、長く付き合っていると感情の機微を読み取るのは容易かった。

見えない犬のような尻尾が凜の背後で揺れているような光景を幻視した。何か、嬉しそうだった。というよりは、興奮しているといった感じだろうか。主人に出会えて喜

ぶ子犬のようだった。

「えっと、おはよう。朝からどうしたんだ？ 仕事で何かあったか？」

何か問題でも発生したのだろうか、と思いつながら聞くと凧は首を左右に振った。

「ううん。何も問題はないよ、智弘さん」

「え、どうして名前呼び？」

今までプロデューサーと呼ばれ続けてきたから、やはり名前で呼ばれるのは慣れない。俺を名前で呼ぶようになったアイドルは、楓さんに続いて凧で二人目だ。まさか凧から名前で、しかもさん付けで呼ばれることになるとは、世の中本当に何が起こるか分からないものだ。

それにしても、

「呼び鈴で呼ぶ凧、か……」

なかなか面白いダジャレではないだろうか。

「楓さん来てた？」

「何故バレた」

「ダジャレ」

「……あ」

どうやら楓さんのダジャレが感染していたようだ。何という影響力。凧に言われな

ければ気がつかなかった。

「……やっぱり。行動が早い」

楓さんが来ていたと知り、凜はほんの少し悔しそうだった。何かあったのだろうかと思っていると、凜が俺の目を真っ直ぐ見つめた。目を細め、何か探るような眼差しだった。ジト目、とでも言うのだろうか。連日遅く帰宅して、妻に浮気を疑われた夫の気分だった。何だ、このプレッシャーは。漫画的な表現を借りれば、周囲一帯を見えない重圧が襲っていた。気を抜けば膝を屈してしまいそうだった。

「……昨日から今日の朝にかけて、何かあった？」

凜による取り調べが始まった。朝から俺の家にやって来たかと思えば、いきなりどうしたのか。聞いてみたかったが、凜のことだから俺が答えるまでは事情を説明してはくれないだろう。嘘もすぐバレるだろう。普段は割と他のアイドル達の中でもリーダーシップのある子だけど、たまに強情な時がある子だ。他のアイドル曰く、凜は俺に対してだけ自分に素直なのだという。

どう言おうかと迷い、誤解を招かないように昨日から今日あったことを伝えた。

「昨日は特に何も。仕事を辞めてから家に帰って、久しぶりにゆっくり休めた。ベッドが気持ち良かった」

「……朝は？」

「俺の知らない合い鍵を使って家に入って来た楓さんに起こされて、朝食を作ってもらった。朝ごはんが美味しかった」

「さつきから、何その小学生みたいな感想」

「あ、すみません」

凜の圧力が怖くて、言葉が上手くでなかった。今も目力が強くて、膝が笑ってしまいそうだ。

とりあえず、このままでは会話がままならない。俺は場の空気を和ませようと、凜の頭へと手を伸ばした。

「あっ……」

「よしよし」

凜は昔から、頭を撫でると落ち着いてくれる。先ほどまで体から放たれていた強い感情は霧散し、見えない尻尾を左右に振る凜の幻が戻ってきた。顔にはほんのりと赤みが差し、切れ長の目の内側で瞳が落ち着きなく左右に揺れていた。どうしていいかわからないけど、拒むことはできないといった様子だった。

その姿が可愛くて、俺は凜の綺麗な黒髪を乱さない程度に頭を撫で続けた。

「ちよつと、頭、そんなに撫でないでくれる……う？」

「あ、(う)めん」

その後五分間ほど頭を撫でた俺は、顔を真っ赤にした凜に言われて手を止めた。自分から触っておいてあれだけど、言うの遅くない？ それとも言いにくいのだろうか。やっぱり不用意に頭を撫でるのはやめたほうがいいかもしれない。凜の髪、好きなんだけどな。

「別に、撫でるなどは、言っていないからっ」

「どっちなの？」

本当に、不器用で可愛い子だと思った。

## 凜イベント2

「それで、結局何の用事なんだ？」

凜の頭を撫でて堪能した後、俺は手を離して尋ねた。凜は顔を赤くして、何か物足りなさそうに俺を見ていた。結局十分近く撫でたわけだけど、それでも足りないの？ 出会った当初のツンツン具合はどこへ行ったのだろうか。

「たまたま近くを通ったから。……良ければ、一緒に散歩でもしない？」  
「散歩か」

休日はいつも部屋でごろごろしていた。特に今日は仕事を辞めた翌日でもある。安らかな気持ちで一日を怠惰に過ごすつもりだったが、最近運動不足だからな。楓さんにも体力では全然勝てなかったし、そろそろ生活を改めようか。

「よし、ジャージ着てくる」  
「茜と走るつもり？」

その場で屈伸をしてから部屋に戻ろうとする俺を見て、凜は尋ねてきた。

茜というのは、ひのあかね日野茜さんのことだ。まさにパッションの中のパッションとも呼べるほど元気な高校生アイドルだ。俺からすると無尽蔵に近い体力を有していて、俺は日野

さんが本気で疲れている姿を見たことがない。前に休日に偶然出会い、なぜかそのまま一緒に走るようになって死ぬ思いをした。ジャージを着ていたから、運動するのだと勘違いされた可能性があった。

その日野さんと一緒に走る？ うん、絶対無理。

私服だったら、仮に出会っても走らされることはないだろう。念のため靴も運動しやすい革靴にする。家の鍵も閉めた。よし、準備完了だ。

「このまま行こう」

「そこまで走りたくないの？」

「今日は遠慮したい」

しっかりと運動しないとさすがにまずいと思っている。でも、それは今ではない。明日から頑張る。

「太るよ？」

「くっ……。大丈夫だ。食生活はしっかりとしているし、筋トレだって……」

「はいはい。それじゃあ行こうか」

「スルーしないで！」

歩いて行く凜の後に俺も続く。マンションの共有廊下からエレベーターを使って一階のロビーへ。そこからマンションの外へと出た俺は、午前中の青空から注ぐ日の光を

浴びて天を仰ぐ。

いい天気だ。走りたくなってくる。全力は無理だけど。

「茜連れてこようか？」

「歩きます」

俺を見て心情を即座に推察してきた凜を置いて、俺は歩き始める。凜は俺の横に並び、一緒に住宅地を歩く。人通りは少ないが、凜は私服姿で自然体だ。果たしてそれで大丈夫なのだろうか。

「変装とかしなくていいのか？」

「どうして？」

「いや、だって、トップアイドルだろ」

346プロダクション所属のアイドルである凜は、凜と同じく俺の担当アイドルだった卯月と未央とユニットを組んでいる。『new generationズ』という名前を知らない日本国民は少ないだろう。それほどまでに知名度があり、ファンの数も346プロダクション内ではトップクラスだ。

その凜が何の変装もなく私服で歩いている。ファンに見つかれば大変だ。

「変装すると余計に目立ちそうだから。出掛ける度に変装するのも面倒だし」

「そういうものか？」

アイドルの私生活にまで深く言及していなかったが、もしかすると他のアイドルもそうなのかもしれない。楓さんも特に変装をしている様子もなかったし、俺がおかしいのだろうか。

「うーん」

「バレたらバレたで、智弘さんが守ってくれるでしょ?」

「ああ、当たり前だ。何せ俺は凜の——」

そこまで言つて、俺は言葉を止めた。

違う。俺はもうプロデューサーではない。もう辞めたんだ。次の就職先は一般企業で、芸能界と関りはない。アイドル達との繋がりは断たれている。それなのに、こうして凜達アイドルと一緒にいてもいいのだろうか。

「なあ、凜」

歩きながら横の凜に話しかける。

「何?」

「俺達つて、もう一緒にいないほうがいいよな?」

「そう?」

「そうだよ。だって、アイドルと一般人だぞ?」

この場面を性格の悪いハイエナのような記者に見つかれば、写真を取られて週刊誌に

あることないことを書かれてしまうだろう。346プロダクションは今のところそういった被害には遭っていないが、確か結構昔に765プロダクションという芸能事務所で被害に遭ったアイドルがいた覚えがある。

嘘だとわかっていても、アイドルに悪い評判が流れるのは嫌だ。だけど、アイドル達に不自由な生活を送らせるのもどうなのだろうか。って、これはもう俺が考えるべきことではないか。でも少し気になるから、同僚に後で相談をしたほうがいいか？

「気にしすぎだと思っけど。って、どうして離れるの？」

俺がアイドルである凛から少し距離を取って歩くと、凛が距離を詰めてきた。いやいや、仮に恋人同士であってもその距離は詰めすぎだろう。アイドルと一般人の距離ではない。絶対に誤解される。たまたま周りにひと気がなくて助かった。

「近いから」

「そうは思わないけど」

「客観的に見れば近いんだよ」

「智弘さんと未央が一緒に歩いていた時も、これくらいの距離感だったと思うけど」

言われてみればそうだ。未央はよく俺の体に抱き着いてきていた。一応その度に一々指摘していたが、結局最後まで改めることはなかったな。というわけで、一番俺に對してボディタッチが多いのが未央で、その次は凛だろうか。

「それはそれ、これはこれ。いいから離れて」

「……納得できないけど」

俺が凜の接近を手の平で制すと、凜は不満そうな表情で渋々従った。

「渋るしぶりん……」

「楓さんの駄洒落の感染力はいつたいたいどうなってるの？」

「はっ……」

気がつけば駄洒落が口を突いて出ていた。いけない。凜の言う通り凄まじい感染力だ。このままでは、朝起きると楓さんになっていた、なんてことになりかねない。

くだらないことを考えながら歩く俺達。

すると、正面の左手に公園が見えてきた。見覚えのある公園だ。そう思っていると、凜に服を引っ張られて公園に誘導される。

「こつち」

「公園になにかあるのか？」

「休憩、しようと思って……」

凜はそのまま俺を近くのベンチに連れていく。何だろう。急に落ち着きというか余裕がなくなった様子。顔も赤いし何かあったのだろうか。

俺達はベンチに座った。俺の横に凜が腰かけたのだが、その距離は少し開いていた。

もう少し近く座ると思っていただけに意外だった。まあ、これが本来普通の距離感なんだけど、随分と感覚が毒されてしまったようだ。

「あの、さ……」

「ん、うん……」

凜が少し緊張しながら話しかけてきたせいで、俺も妙に緊張した受け答えになつてしまふ。本当に何があつたというのか。アイドルとしてステージに立つて大勢のファンを歌とダンスで魅了する存在が心を乱す何かが。

「前にも聞いたけど、智弘さんって、好きな人いるの？」

その質問に、俺は息を飲む。確かに前も聞かれたことがある。だが、そのときと今は少し状況が変わつた。凜の顔はここまで真剣ではなかつたし、楓さんの一件もあつて俺の心境も異なつている。

どう答えるべきか。少しだけ思索してから口を開いた。

「……正直、好きな人がいるかどうか、よくわからない」

真剣な質問に、俺は真剣な答えを返した。凜や自分に嘘をつかず、正直な現在の心境を俺は語つた。

「学生時代は部活動が楽しくてそういうこと考えたこともなかつた。社会人になつてからは仕事が忙しくて、考えている余裕もなかつた。だから、誰かを好いたり、誰かに好

かれたりっていう感覚が俺の中で曖昧なんだ」

精神が老成している、と言われてからかわれたこともあったが、別に感情が枯れていくわけじゃない。異性には興味がある。かと言って、楓さんに恋心を抱いているかは曖昧だった。楓さんは魅力的な女性で、一緒にいて楽しい。でも、それは本当に恋心なのだろうか。

「……そっか」

凜は少しほつとしたような顔をしていた。

「つてことは、まだ私にはチャンスがあるつてことだよな」

そう言うや否や凜はベンチから立ち上がり、俺の前に移動した。いったい何を、と思う間もなく凜の顔が俺の顔へと迫った。

「え……んんっ!？」

そして、凜の唇が俺の唇に重なった。柔らかい。そして、シャンプーのいい匂いが鼻をくすぐる。凜の吐息も直接伝わってきて、今までにないほど凜を近くに感じた。

長い。どれだけ触れ合っていたのだろうか。心臓が激しく鼓動し、頭は上手く考えをまとめてくれない。ただじっと、恥ずかしそうに目をつむって俺と口づけを交わす凜の顔を見ていることしかできなかつた。

その時間は永遠ではなく、やがて終わりを迎えた。

「んっ……」

凜の唇が離れ、少し距離を離れた凜の顔。不安と羞恥が混在し、頬を紅潮させた顔で俺の瞳を真っ直ぐ見据えた。

「……好きな人がいないなら、私のことを好きになつて」

凜のその言葉が、俺の心に強く突き刺さった。

「私を選んで後悔はさせないから」

どうして俺の担当アイドル達は、こいつも男前なのだろうか。

## 未央イベント1

時間が止まったように感じた。そう思えるほどの放心状態で、俺は凜に向き合ったまま体と思考を停止させていた。

休日の午前中。ベンチに座る俺の前には、青い空とその下の公園を背景にした凜。頬を真っ赤に染めて、俺をじっと見続けている。俺が目を見開いたままその視線を受け止め続ける間、俺たちの間に沈黙が横たわった。

風が吹き、凜の長い黒髪がさらさらと揺れ動いた。

そこでようやく正気に戻った俺は、思考が停止していたことに気がついた。

「……その」

何を言おうか考える前に口が開き、声が漏れていた。

凜は俺の声を聞いたビクツと肩を震わせたが、それは一瞬だけだった。平然とした態度を意図的に保とうとしている。俺に弱いところを見せたくないからなのだろうか。それとも、告白したからには堂々としていようという想いからなのだろうか。

どちらにしても、強い少女だと思った。

そんな凜が、俺の唇を奪い、好意を伝えてきた。殴られたかのような強い衝撃が心を

襲っていた。今もぐらぐらと心が揺れ、心臓が激しく鼓動している。

「……俺は」

抑えようとしても鎮まらない精神状態では、俺の思考は上手く働いてくれなかった。同じ処理を何度繰り返して行う機械のように、俺の思考は堂々巡り。

どうして楓さんも凜も、俺のことを好きと言ってくれるのだろうか。恋愛経験のない俺には、この状況に至るまでの凜達の心の変化がわからなかった。恋愛経験豊富という噂の力リスマアイドル、城ヶ崎美嘉じょうがさきみかさんのような人ならば容易だろうが、俺には皆目見当もつかなかった。

俺が凜のことをどう思っているのかも、言葉にできなかった。

素直にそれを伝えようと思つて口を開きかけた俺だったが、凜に機先を制された。

「答えは、今すぐはわからないから」

「え……」

「できればゆつくり考えて。智弘さんがいったい誰のことを好きなのか」

凜はそこまで言うのと、力を抜くように小さく息を吐くと俺に背を向けた。

「り、凜……！」

歩き出す凜の方向に、ベンチから立ち上がった俺は手を伸ばし、声を放った。だけど、凜は止まらなかった。そのままスタスタと小走りに足を進めたかと思うと、徐々に速度

を上げて走り出した。あつという間に公園の外に出ていく。

凜の姿は見えなくなつた。公園には手を伸ばした体勢のまま立ち尽くす俺だけが残された。ちょうど公園には他に誰もいなかったが、誰かがいれば俺は不審な目に晒されていただろう。もつとも、仮にそうなつても、今は気にしている余裕は俺にはなかった。俺は手を体の横に降ろし、立ったまま凜が消えた方向を見つめ続けた。

俺は、どうすればいいんだ。

楓さんに続いて凜からも想いを伝えられた。勘違いしようのない直球の言葉と態度。思えば、プロデューサー時代の記憶を探ると二人が俺に好意を寄せていると思われる場面は何度かあった。俺はそれを勘違いだと思っていたのだ。アイドルがプロデューサーである俺に好意を寄せるわけではない、と。

でも、勘違いではなかったことを今になって知らされた。当事者である二人から。

知つたからには、これまで通りではいけない。凜が言ったように、ゆつくりと考えるべきだ。そして、考えた結果を二人に伝える。それが俺に与えられた使命だと思つた。これを放棄しては、男ではないだろう。

俺は下ろした両手に力を込めて握つた。

男前なアイドル達に負けてはいられない。俺も、男らしくあろうと思つた。

公園を出て、俺は少しの間散歩をしていた。自宅に引きこもつてのんびりするより

も、体を動かしていたほうが頭は回る。久しぶりの緩やかな時間を、散歩という健全な行為で楽しみながら思案を巡らせる。

そもそも、恋愛とは何か。そこまで遡って考えなくてはならないほど、俺は恋愛に疎いわけじゃない。恋愛をテーマにした物事はこの世界に有り触れているし、今まで生きてきた中で接してきたことはある。小説とかドラマとかゲームとか、形は様々だ。そう言えば、とあるゲームで三人の女性の中から妻として一人を選ばなくてはならない場面があったことを思い出す。あの時は、結構悩んだものだ。ちなみに、黒髪の姉御肌な女性を選んだ。

「……って、現実にはゲームじゃないんだぞ……」

創作物を参考にしようとするのは何か違う気がする。しかし、他に参考にできるものがない現状でもある。

「うーん……」

結局、自分自身と向き合うことが正しいとは思っただが、どのようにして向き合えばいいのだろうか。経験がないから、どうすればいいのかもわからない。

我が事ながら女々しくて自己嫌悪を抱いた。

「男らしくありたい……」

「え？ プロデューサーが？」

「うん。……って、あれ?」

自分の呟きに答える声が聞こえ、俺は横に視線を向けた。

そこにいたのは、活発的な印象を見る者に与える少女がいた。毛先が外側に跳ねた茶髪と、大きな眼が印象的な楽しそうな表情が似合う整った顔。意外に豊満な肉体は動きやすそうな服に包まれていた。

本田未央。俺が担当していたアイドルだった。

「み、未央……?」

驚きのあまり、俺は動かしていた足を止めた。

「奇遇だね、プロデューサー。こんなところで何してるの?」

未央に言われ、俺は周囲を見回す。

公園から離れて、いつの間にか人通りの多い街中まで歩いてきたらしい。周囲にはそれなりの人がいて、俺の隣には未央がいた。外出中だろうか。楓さんや凜といい、人気アイドルだというのに至って自然体だ。

「って、……待て。ちよつとこつち来て」

「え、わわっ、ぶ、プロデューサー……!?!」

俺は未央の手を引き、近くのビルとビルとの路地に未央を連れ込んだ。未央を背に庇うように立ち、視線を外に向ける。誰かが未央に気がついて探している様子はない。

良かった。人気アイドルの未央がいることはバレていないようだ。

「おーい、プロデューサー」

「ん？ 何だ」

「さつきから何してんの？」

「周囲の警戒。プロデューサーとしては、アイドルの身を……」

そこまで考えて、俺はプロデューサーではないことをまた思い出す。まだプロデューサー時代の考え方が抜けきっていないらしい。外で変装もせず自然に振る舞うアイドルを見ると、いつもこうだった。

「変わらないね、プロデューサーは。……いや、もうプロデューサーじゃないか。えーと、ともひー？」

「は？ ともひー？」

未央が口にした珍妙な単語に、俺は首を傾げた。

「うん。プロデューサーのあだ名。智弘だから、ともひー」

未央は色々な人にあだ名をつけている。普通に名前と呼ぶ方が少ないくらいだ。今まではプロデューサーという肩書きが未央にとつてのあだ名のようなものだったようだが、俺が仕事を辞めた今となってはそのあだ名もつかえない。未央はそう判断して俺に新たなあだ名をつけたいらしい。

だが、ともひーはどうなのだろうか。

「普通に名前がいいと思う」

「えー、いいと思うんだけどなあ。このふにやけた感じがプロデューサーにぴつたり」

「俺って、ふにやけてるの？　っていうか、ふにやけてるって何？」

「さあ？」

未央は体ごと横に傾けて、疑問を表現した。

「ノリで会話するのやめてもらえる？」

「あははっ」

未央は腰に両手を当てて、面白そうに笑った。何がそんなに面白かったのかわからないが、何だか未央の笑い声を久しぶりに聞いた気がした。

「何かこのやりとりが今となっては懐かしいね」

未央も似たような感想を抱いたらしい。

「辞めてまだ全然時間が経ってないんだけどな」

「そうだよね。まだ、辞めたばかりだもんね」

未央はどこか遠くを見つめるように視線を逸らした。気のせいでなければ、その眼差しには悲しげな感情が含まれているように思えた。

「それだけ、私の中でともひーの存在が大きかったのかな？」

「未央……」

何と言葉にしているのかわからず、俺は困った。未央は大胆不敵に見えて結構繊細な性格だ。たまに言葉に注意しないといけない時がある。

「ねえ。ともひー、一緒に遊ばない?」

「え? 遊ぶ? 今日、仕事は?」

「今日は早朝に仕事があっただけで、あとは一日休み! いやあ、まさかモタモタしているうちにともひーの方からのこのこ出向いてくれるなんて、やはり天は未央ちゃんに味方しているようだ! ってことで、はい、これ」

未央が言いながら肩に下げていた鞆の中へと手を突っ込み、指先で掴んだそれを俺へと手渡してきた。

未央から託された物を見て、俺はまたしても戸惑った。

「なにこれ、眼鏡?」

それは、黒縁の分厚い眼鏡だった。度は入っていない伊達眼鏡のようだ。未央と眼鏡という組み合わせが想像できず、俺は少し頭を悩ませた。

「それ、ともひーの分」

言いながら未央は、鞆の中から縁がオレンジ色の眼鏡を取り出して自分でかけた。似合っているような、そうでもないような。とりあえず、眼鏡をかける未央が新鮮だった。

俺の持つ黒縁とどうやら色違いの物のようだ。おそらく、それも度が入っていないのだらう。

度が入っていない眼鏡が二つ。それはつまり。

「あ、もしかして変装用？」

「うん、貰い物だけだね。ほらっ、行くよ」

理解したと同時に、俺の腕は未央に引っぱられた。

「あつ、ちよつと待て！ ま、まだ眼鏡かけてないっ！」

言っても未央は止まってはくれず、俺を牽引したまま足早に歩き出した。俺は崩れそうな体勢の中でどうにか足の前に動かしながら、未央から渡された眼鏡をかけた。